

Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現れていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。もっとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんがそろって一日うちを空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち着いて、そういうことを話し合うわけにもいかないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果初めは向こうから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があつたらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙ってうちの者の様子を観察してみました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんのそぶりにも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自由以前と自由以後とで、彼らの挙動にこれという差異が生じないならば、彼の自由は単に私だけに限られた自由で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは確かでした。そう考えたとき私は少し安心しました。それで無理に機会をこしらえて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにするほうがよからうと思つて、例の問題にはしばらく手をつけずにそつとしておくことにしました。

こう言つてしまえばたいへん簡単に聞かえますが、そうした心の経過には、潮の満ち干と同じように、いろいろの高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心が果たしてそこに現れているとおりのだろうかと思つてもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指しうるものだろうかと思つてみました。要するに私は同じことをこうもとり、ああもとりしたあげく、ようやくここに落ち着いたものと思つてください。さらに難しく言えば、落ち着くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかもしれませんが。

そのうち学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立ってうちを出ます。都合がよければ帰るときにもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違つたところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、てんでんにてんでんのことを勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自由が私だけに限られてるか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答えしだいで決めなければならぬと、私は思つたのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察どおりだったので、内心うれしかりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にもかなわぬという自覚があつたのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資のことで養家を三年も欺いていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損なわれていなかったのです。私はそれがためにかえつて彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向かって、彼の恋をどう取り扱つつもりかと尋ねました。それが単なる自由にすぎないのか、またはその自由に次いで、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙つて下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、全て思ったとおりを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないとはつきり断言しました。しかし私の知ろうとす

る点には、一言の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち止まってそこまで突き止めるわけにいきません。ついそれなりにしてしまいました。